横浜医学，64，565-573（2013）

総　説

最新のリンパ浮腫の診断と外科治療

前　川　二　郎

横浜市立大学医学部 形成外科学

要　旨：リンパ浮腫とはリンパ流が障害され細胞間隙に間質液が貯留する病態をいう．リンパ流障害の原因として最も多いのは癌治療に関連したものであり，所属リンパ節の外科的切除，放射線治療によるリンパ流の中枢閉塞や狭窄で四肢リンパ浮腫が発症する．これらを続発性リンパ浮腫と呼ぶが，これに対し明らかな原因がなく発症するリンパ浮腫を原発性リンパ浮腫と分類する．臨床症状だけでなく，リンパシンチグラフィやインドシアニングリーン蛍光赤外線リンパ造影法など，リンパを可視化する検査法によりリンパ浮腫をより客観的に診断できる．これらの画像検査でリンパ節やリンパ管の描出不良，リンパ側副路の描出，リンパ管弁不全によるリンパ液の皮膚逆流現象などを認めることによりリンパ浮腫を早期に診断でき，同時にリンパ浮腫の重症度評価も可能となる．リンパ浮腫の治療目標は浮腫のコントロールによりQOLの低下を防ぐことである．治療は保存療法と外科療法に大別されるが，保存療法として徒手的リンパドレナージと弾性着衣による圧迫療法，外科療法としてリンパ管静脈側端吻合術が主体となる．症例の重症度によって治療効果が異なるが，保存療法と外科療法の二つの治療を組み合わせることで最大の治療効果を得ることができる．長年，リンパ浮腫は治癒が難しい疾患であると言われてきた．最近，医療機器の進歩に伴いマイクロサージャリー技術を基にした低侵襲な外科治療としてリンパ管静脈吻合術によりリンパ機能がある程度保たれている例では手術後に保存療法が軽減し，保存療法を全く必要としない例が報告されている．これからのリンパ浮腫治療はエビデンスに基づいた新しい診断技術，治療法によりリンパ機能障害の程度を把握して，個々の重症度に応じた適切な治療法を行うことが求められる．本稿ではリンパ浮腫の最新の診断に触れ，外科治療の効果について述べる．